

### 第三十 言語雜考

本居 豊 穎

歌文の書どもを讀むと思ひよれることいろ／＼あるを今思出るまに／＼  
ついでに定めずるにしろし出て世のものしり人たちに談らひ試んと  
す。

○つゝ

源氏物語夕顔卷に、みするじんつゝいゐてかの白くさけるをなん夕がほと申待る、同  
若紫卷に、こちやといへばつゝいゐたり、枕草子春曙抄本卷一十四丁に、犬のはしらのもとにつ  
いゐたるを同書春曙抄本卷七十五丁に、ものいみなればえみずとてかみにつゝいさしておき

たるを、云々などのつゝいゝといふ語は、うつほ物語、狭衣物語、其他の書にも多くみえて、  
雅言集覽にも、其例を多く引出たり、同書にも、俗譯して、其ま、一寸也又急の字の心  
也にはかの意也と注し、源氏物語評釋の語釋にも同意の解ありて、共に崇神紀の急  
居、此云菟岐子ツキとあるを引たるが如く、ツキをツイと音便にいへるにて、啄ツクも、鳥の嘴  
にて、突食ツキハムなり、朔ツキイダチも、月立ツキダチにて、皆同例なるは論なし、然るに前に引たる源氏物語の二  
所と、枕草子の前なる方などは、跪ツキといふ字を宛て、よくかなひ、其他の例も、多くは、膝  
を突くにいへるが多けれど、枕草子なる後の方つゝいさしてとあるは、突挾ツキサシなれば、跪  
の字は當らず、元來、これらのつゝいは、皆突ツキにて、つゝいゐとあるゐにて、跪の義とはなる  
なり、日本紀に、急の字をよみたるは所謂義訓なり、さて今時の俗言に、俄に然る事を、  
ツイ云云シタリといふは、遂に云云せりといふ意かとも思はれ、其方ならば、ツヒと  
書くべき理なれど、これも突然なる意とすれば、此「つゝい」より出たるならんか、

○う

前條にいへる崇神紀の急居、此云菟岐子とある居を、ウといへるは、甚めつらし、キル  
といふべきを如此もいへる言ありしなるべし、之を以て按ふに、近來用字のかなは、

和行にて、モチキ、モチキルと書く事に大かたは定りたるが如くなるをモチキテ、モチキルベシなどは可なれど、言の尾にいひ切る時、波行ならば、モチフといふべきをモチキルといはざるを得ざれど、此語いかにも穩ならざる心ちす、前なる急居も、ツキキルといふべき所なるに、ツキウとある訓注に據れば用をいひ切る時は、モチウといひても可なるが如し、率もヒキキルなれどいひ切るには、ヒキウといふべくや、然いへる例はいまだ見あたらざれど、もし然いひて可なりとせば、詞の上は宜しきを得るこゝちす、

○を

源氏物語桐壺卷更衣のうせに、うへも御涙のひまなく流れおはしますをあやしとみたてまつりたまへるを云云此を文字穩ならず、此下に脱句あるべしと、玉小櫛補意にいひ評釋にも此をもじ下に係る所なしといへり、同卷楊貴妃の事に大液の芙蓉未央の柳もけにかよひたりしかたちを云云此をも文意つゝかねば此間に、おもふに、などの語ありしが脱たるかと、評釋に疑へり、豐額按ふに、これら皆脱句あるに非ず、枕草子春曙抄本卷一十五丁によろこび奏することをかしかれ、うしろをまかせて笏と

りて御前の方にむかひてたてるをはいしふたうしさわぐよ、同書同卷廿一丁、何事もなくよろづにめでたきを、同書卷二廿二丁をかしと見ぬ人なかりけんを、尙多けれなどあるを、皆普通のをにあらす中には、がといふに見て聞ゆる所もあれど、然のみに非ず、これは例の古言に阿那爾夜志愛袁登古袁、また夜幣賀岐都久流曾能夜幣賀岐袁などある袁に同じく、ヨといはんが如き歎きの意を帶たる助辭にて、萬葉集の歌に、見にこしわれを、妹まつわれを、なとあり又後の歌にもある、ぬれてを、ゆかむ、しらすとをいはんなどの助辭も、共にこれより出たるものならん、然れば桐壺卷なる二所ともに、よといふが如く、此所にていひ斷りたる詞と見れば、何のさしつかへもなく、脱句脱語の論には及ばざるべし、

○をし

枕草子春曙抄本卷一廿丁日のおましのかたにおものまゐる足おと高し、けはひなとをしをしといふ聲きこゆとあるをし、は警蹕の聲にて、お、の誤なりと藤井高尙の松の落葉にいへり、但し警蹕と稱唯とは共にオ、と唱ふるも其聲音に別あるは、世俗淺深秘抄に、稱唯時塞口、警蹕時開口也とありて、塞口時には、軽く低き音にて阿

行のオなり、開口時には、重く高き音にて和行のヲなる謂にして、稱唯はオ、警蹕はヲ、のかななる事、伴信友の應聲考に委しくいへり、然れば右の枕草子のをし、くは、かなは尙をにて、を、く、の誤りとすべし、又右の文なる、けはひなと、といふ詞も、少しごと足らざる詞なるを、慶長の寫本には、けいひつなと、あり、けい、を、けは、と誤り、つを脱したるなり、

○せばがり

枕草子春曙抄本卷二廿五丁 き、もいれすいらへもせでせばがり出れば云云せばがりといふ詞めつらし、これは俗言に、ウレシガル、ホシガル、イヤガルなどいふ其形狀をいふ言ならんか、古言に「はびこる」といふを後には「はびこる」といひ雅言に「ひろぐる」といふを俗言に、ヒロガルといふも同例の言なるべし、

○きやさせ

枕草子春曙抄本卷四廿四丁 しら山のくわんおんこれきやさせたまふな云々きやさせとは、いか、なる詞なり、雅言にては「けたせ」といふべけれど消ち消つを後には消し消すともいへば「けさせ」とあるべきなり、これは消させと書たりしを、かなに寫す時誤り

たるか、俗言には見さすを、ミヤス、絶さすをタヤス、肥さすをコヤス、などいふ類にて消さすキヤスといふはエサの約「ヤ」となるなれば、其下に、又さといふは重言となる理なり、

○あういかん

枕草子春曙抄本卷五廿二丁 こなたさまはた、おくれじと思ひつるに、人めもしらすはしられつるを、あういかんこそいとすさまじけれ云々このあうは噫と歎じたる詞なりと注せり、但し此所にては、ア、といふ歎辭も穩ならず、これは上にこなたさまとあるに對してあなたさまへいのかんの意にて、あの方といふ意の言なるべし、俗言に「アスル、カウスル」などいふは、これより出たるならんか、果して然りとせば「あう」とあるは尙「あ、」を寫誤れるにやあらん、

○おもふべしやいなや

枕草子前條の次廿六丁 おもふべしやいなや、たい一ならずはいかゞと、はせたまへりとあるを、春曙抄頭注に、清少我を思はんやとの戯なりとあり、又他の説に、后宮の清少を思ひたまふと清少の後宮を思ひ奉ると雙方にかけたるが如く解たるもあれど、

共に非なるべし、此所は、后宮より清少を思ひたまはんか否との御問なるは次文によりて明らかなり、清少より后宮を思ひ奉る事は、此所にはさらに用なし、

○ゑぬたき○ときから

枕草子春曙抄本卷五廿八丁これや此高名のゑぬたきなどさもみえぬといひけるかへり事に、それはときからもさも見ゆる名なりといひたりけるなん云々此ゑぬたきときからの名いかなる意にて互にかくいへるにか名は珍らしくて形はさもみえぬとの心なりと注したれど、尙其義は明らかならず、按ふに「ゑぬたき」のゑぬと犬のエヌと通へば、この男犬に似たると思ふに然もあらずといへる惡口なるべし、さて「ときから」といふ方も亦之に同じやうなる意にて、いひかへしたるさまなるを、ときからの方は甚解がたし鳥の鳩日本紀に桃花鳥とかけり和名ツキを、後世はトキと呼ぶ、是にて犬の返答に鳥の事を以て嘲りたるか、又は僧家に非時といふ食物をトキといへるなどを思へるか、尙考ふべし、

○それまた時からがいにはせたるなり云云

枕草子前條のついきにある「それまた」といふよりの詞を時柄か詞なりと注して、此段すべ

て清少と時柄との問答としたるは非なるべし、今までかくいひ傳ふるはときこえたりといふ詞其時柄にむかひていふ詞に非ず、そも、此段の「はやうおほきさいの宮に」といふよりを別段としたるよりの誤にて、此段は、前の信經の物語につゞきて一條なり「はやう」といふより「かくいひ傳ふるは」まですべて清少の信經に對していへる詞にて「きこえたり」とは信經に向ひていへりの意なり依て「それまた時から」がいにはせたるなり云云は、信經の詞にて「時からが」と名を指たるも信經の詞なればなり、次なる歌の一事皆信經の事なり卷六のはじめにあるつくも所の別當する比とある一事も亦信經の事なるべし、

○いかがはめでたからぬことなし

枕草子春曙抄本卷六一丁本まげいしや春宮にまゐりたまふほどの事などいかはめてたからぬ事なしとある「いかは」にて句として傍注に「いかなる事にかとの心なりとあれど非なり」「いかは」は「めでたからざる」といふ語を省きて含めたるなり、次に「めでたからぬ事なし」といへるにてまさらはしくはあれど、これは又別に「いかは」めてたからざる、すべてめてたからぬ事はなしといふ意なり、

## ○御さうしの南

枕草子前條のに、宮は御さうしの南に四尺の屏風とある御さうしを職御曹司なりと注したるは誤なり、此所は登花殿中にて、淑景舍御方に御對面の時にて、次の文を見ても登花殿中なる事明らかなり、依て御さうしとあるは、登花殿の内にて此時假に后宮の御休所をも設けたるなれば、御さうしといへるは即ち淑景舍の御爲に設けたる御曹司をさせるなり。

## ○まづしるさま○おまへにはいかに

枕草子春曙抄本卷七廿三丁 まづしるさまををさ女もうちまもりて、御まへにはいかに物のをりことにおぼし出聞えさせたまふなるものをとてたれもあやしき御ながるとのみこそ侍るめれ云云此「まづしるさま」といふ詞を諸注皆后宮の御消息を清少の見知りたるさまにのみ解きたるは粗なり、これは古今集の歌なる世の中のうきもつらきもつけなくにまづしるものは涙也けりといふ歌詞を以てかけるにて、此時清少の后宮の御消息を拜見してうれしく、且哀しく大に感じたるを以て思はず眼に涙を、浮べたるをいへるにて、其落涙の狀を長女も見つめ居たるなり、さて又次な

る「おまへにはいかに」といふ詞の意まきはしけれど、これは長女の詞にて、后宮の御まへにはいかばかりか清少の事を深く思しめし給ふらんとといふ意をいかにの下に略して含めたる詞なるべし、今東京の俗言を以て譯さば、御前様ニハドノヤウニカ」といひて其下に「アナタノコトヲ思ッテイラツ。シャイマセウ」といふ意を含めたるが如し。

○むかしかべの中よりもとめ出たりけん書の名をば、今の世の人の子は、ゆめばかりも身の上のことはしらざりけりな。

此は十六夜日記の發端の文なり、かべの中よりもとめ出たりけん書とは、殘月鈔にも注したるが如く、古文孝經の事なるは論なけれど、此條の文は「かべ」と「ゆめ」とを對へ「中」と「上」とを對へてあやとなせるなり、夢をかべといふことは後撰集戀一にましろまぬかへにも人をみつるかなまさしからなん春の夜の夢といふ歌あり、其他にもありていづれも壁にかけていへり。

○みたりのをのこゝとも、ちの歌のふるほぐども。

これも十六夜日記のはしめの文にて、三人と百千とを對にしたるなり、これらの事

殘月鈔にも注せざれば、文を読む人たちの爲に、おとろかしおくなり、

○かめのかゝみ

これも同書にあつまのかめのかゝみにうつさばくもらぬかげもやあらはるゝと云々ふあり、龜鏡龜鑑といふことあるを和らけて如此いへるは論もなけれど、かくの如く漢語を文字のまゝによみて國語に用ゐるは元來無稽なるわざにて既に清水濱臣が據字造語抄に此類を多く出せり、龍顔をタツノミカホ、柳營をヤナキノイトナミ、牽牛花をウシヒクハナ、時鳥をトキノトリなどいふ類にて、たゞ文字のまゝの詞にて、國語の上を以て見るには、甚拙愚なる言なり、近來の歌に螢火ホタルビ、水仙をミヅノヤマビトなどいふも同例にして所謂直譯の弊なり、近來の人の歌に、蒸氣船をムシケブチ、馬車をウマグルマなどよめるがありしやうに思はるゝも、亦同例なるべし、これらの詞は、よく／＼考へていはまほしくおもはる、

○かたは ○かたほ

伊勢物語六十段男女がたゆるされたりければ、女のある所にきて、むかひをりければ、女いとかたはなり云云かくかたはにしつゝ、ありわたるに、源氏物語卷木かたはな

るべきもこそ、とゆるしたまはねば、同卷顔かたはに見ぐるしからぬ若人なり此他

し此かたはといふ詞は、車の片輪より出て、わの假字としたるを、うつば物語に、矢の

羽の事に、かけていひたれば、はの假字にて鳥の片羽より出たりと契沖師が源注拾遺にいへるによりて、萩原廣道の評釋にも辨じたれば、先これにて明かなるが如し、

不具者をかたはといふも、亦これより出たりとすべし、然るに、別に「かたほ」といふ詞

あり、源氏物語卷顔かたほなるをだにめのとやうの思ふべき人は、あさまじうまほ

に見なすものを同卷見る人さへかたほならず、ものほめがちなるとつくり事めき

て云云し、此かたほといふ詞は、まほに對へていへるを以て、源注拾遺に、船の眞帆、

片帆より出たりと注せるを玉小櫛に、船より出たる言には非すて、ほは別に意あるべしといひ、評釋には、なほ拾遺の説を是としたり、かたほ「まほ」に對にいへるを見れば、

實に、船の帆より出たりとして、子細なきが如くなれど、船の帆に眞帆、片帆といふ事古くは、いへる例なくして、却て、後世の語かと思はるゝ、よしあり、玉小櫛の説も、さ

る意ありて別に意あるべしといへるには非るか、依て按ふに、古く「まほら」といふ言ありて、古事記なる倭建命の御歌に、夜麻登波久爾能麻本呂婆とあるを、日本紀には、

摩保羅摩ホラマとし、又神武天皇紀に日本者云云秀眞國ホウマクニといふことあり古事記の應神天皇の御製に久爾能富クニホといふ言あるを合せて國號考に「ホ」といふは含まれたる意にて、大和國の中央を指すこと、いへり但し尙考ふるに「ホ」といふことは、稻の穂波の穂、又人の頬、船の帆も同じく、表に顯れたるをいふ言とおもはれて、中古の詞に、ほにあらはすといふ言もあれば、秀字を訓む意にて、國のは國のまほら、共に、國の中に、最、秀で、よき地をいふ意ならんか、然らば、此國のまほらといふ言より出て、すべて、勝れ顯れて、正面なるを、まほといひ、それより又、かたほといふ詞の出來たるには非るか、然して、前にいへる、かたはといふ詞も同じさまの意なれば、かたはは、かたほの轉訛にて同言かとも思はる、鳥の片羽より出たりといふも、或は、後世人のおしあての考ならんも知りがたし、

○かつ

萬葉集卷四安蘇々二破アソツニハ且者雖知カハシレモ古今集上雜かつみれどうとくもあるかな月影のいたらぬ里もあらしと思へば此他甚多此かつといふ言は、物の二様にある時にいふ言にて後世は、且亦と重ねてもいひ、又、かつと重ねてもいひて、今更、説くまでもなき

詞なから、其言のもととは別に説きたる人ありやなしやよくおぼえざれども、是は片といふ言より出たるにて、側云々といふ意なるべし、

○きんち

大鏡序きんちが姓は、何ぞと云々、大和物語卷五このわらはに女のいひけるきんちも、今はこゝに見えじかしなどある、きんちといふ詞は、うつほ物語、蜻蛉日記等にもあり他人をさしていふ詞にて、汝といふに同じ、但しいかなる語なるか、別に解釋なかりしやうなり、按ふに、これは君をキンといへるにて、きんだちといひ、公任といふ人名をも、キンタフといふが如く、きんは君の意、ちは男を稱して、古く比古ヒコ遅チまた、父なといふ、ちより出たるならんか、汝といふ詞も、よく似てあれとも、これは、別に「ナ」は人を親しむ言、ナレ、ナニモ、ナチなど古くいへるに、ムチといふ言をそへたるにて、ムチは貴字をよめるが如く、上古に人を貴ぶ稱言なり、

○となへ

枕草子卷三廿丁うへの御つほねのひんがしおもてにみ、をとなへてきくに云々、此となへてといふ詞解しがなければ、清水濱臣は、耳おとなへにて耳に音をなして

といふ意にて、指にて、小耳を押へてきくをいふといへり、但し此説も甚聞取がたし、春曙抄の傍注には、耳をさゝへてなりとあれと、是亦明かならず、不審に思ひ居しに大鏡の條に、心をとへてきこしめせといへる詞あり、依て考ふるに、この大鏡の文は、心を揃へて聞給へといふ意なれば、此枕草子なるも、耳をそろへてといふ意にて、女房たち皆同しやうに耳を立て聞居る事とすべし、枕草子春曙抄本卷十一ノ十丁に、「となふることもさいはれたり」とある所の春曙抄の注に、一人いへば皆同し心に從者をしかる故に、其詞を唱ふる如く云々とある如く、經文などを、衆人の同音に唱ふるより出たるにて、多人數の者の同しさまにするを、耳をとへてとも、心をとへてともいへるなるべし。

○をさ

長字をよみて物の首長といふ事常なり、又「をさむ」といふ詞もありて、治納、修理、收斂等をよむ如く、我國の古書に神を祭るにも、病を療するにも、君の臣を愛撫し給ふにも種々につかひて、甚ひろけれど、約して之をいへば、其物を鄭重に厚く執行ふ謂なるよし、先哲のいへるが如し、これより出て日本紀に幹了、軌制、明直等の文字を「サ

／＼シ」と訓み古今集の長歌に、とのへもる身のみかきもり、をさ／＼しくもおもほえす云々伊勢物語段百七わかければふみもをさ／＼しからず、枕草子春曙抄本卷九ひのさうぞくうるはしくて、今日はひとりつゝ、をさ／＼しくのりたるなとあり、又萬葉集を始として、中古の物語文に「をさ／＼」といふ詞あり、又幼稚を「サナシ」といふも同しくて、皆同言ならんとおもはる、尤物語文にある「をさ／＼」は、玉小櫛に、物をさしつめてたしかにはいはず、大かたに定めていふ詞にて、俗言に「あまり」といふ言これによく當れりとある如くにて、尙俗譯をいはゞ、カクベツ、ダシカニなどを以て當たる方よき場合もあり、右の中に「サ／＼シ」と「サナシ」とは、長といふ語ありて後に出來たる詞の如くなるを、萬葉集卷十の平佐平佐毛禰奈敵古由惠爾波伴爾許呂波要とある詞これより出つは、必長といふより出たりとも思はれず、依て按ふに、これらの語は、元來「ササム」といふ詞が本にて鄭重に念を入るゝ意より物を總轄し主幹する者を長といふ名稱詞とし、又「サ／＼」といふは其形容をいへるにて、二種なるが如くなれるならん。

○あらがふ

枕草子春曙抄本卷後にはならひたるにや、つねに見えしらがひてあり、源氏物語竹川わかき男の心づかひせぬなう見えしらがひさまよふ中に、同總角ことさらに見えしらがふ人もありなどの「しらがふ」といふ詞は、人に知らるゝやうにする形容詞にて、まらは知られの意、かふは散かふ飛かふ行かふなどの「かふ」にて、彼方此方と亂れ混する意なるべし、さて此「かふ」といふ詞には、交、字を宛てもよき事なるが、交の字音も同じきを以て、字音より出たるが如く思ふ人もありなん、かふは「かひ」とも活用する語にて、字音に非るは勿論ながら、國語と漢語とたま／＼同じき類ありて、死まぬ相通し、茂もく相通する類にて、交かふも偶似たり、蛇は反鼻の字音より出たりなどいふ人もあれば、序に一言す、

○すゝろ ○そゝろ

これは歌文ともに甚多き詞にて「すゝろ」は伊勢物語九わがいらむとする道ばいとくらうほそきに云云すゝろなるめを見ること、云云同百十六段むかし男すゝろにみちのくにまでまどひいにけり」とあるを始として、物語草子歌集類に甚多し「そゝろ」はうつほ物語國讓北の方はそゝろにおぼさるれど云云そゝろなる事をおぼすに

こそあらめとあるを始として、物語草子歌集類に甚多し詞の意は、不覺不慮等の文字を宛たるにて、大凡は違ふ事なし、又之をすゝろはし、そゝろはし、すゝろぎ、そゝろぎ、すゝろび、そゝろび、なと、活用形容してもいへり「そゝろか」といふ詞もあれど、これは「天そゝり」といふ語と同じく、簀ソビユといふ方にて、人身の高く大なるをいふにて、別語ならんかと、源氏物語評釋にいへり、接ふに、是も別語には非ずして、元來同意より出たるにて、上古の言に、須佐之男命、須勢理毘賣火須勢理命、立走伊須々岐、廬八燎須酒師競取葺草スシキツヒトリフケルカヤノ乃ソノ噪ノノ岐キなとある、或は進む意、或は動きて靜ならぬ意に、いへるが如く、俗言に、ソ、カシ雅言にもそいソハ／＼スルなどいふにことならず「天そゝり」簀も上の方へ進む形容、熊襲、襲津彦の襲も進みて猛き意、また中古の詞に、そゝのかす、そゝめく、そゝや、なといふ詞も、進み急ぐ意の言にて、皆一なり、依て、元來清音にて、そゝろ、すゝろと濁りて唱ふるは、後世の訛なるへくおぼゆ、

○そし

源氏物語卷木我だけくいひし侍るに云云、此そしといふ詞を、源注餘滴に「そは「すご」の約にて、言過しの意ならんといひ同評釋に、言のものは、えられねど、たゞ事をつよ

くいふ一の語としてあるべしといへれど、共に不完全也、同書明石に「人々に酒をひそしなどして」うつば物語初秋に「御琴たまはりてせめそさせ給へるに」同國讓に「せめそせよ」などもありて、是も亦前なる襲津彦の「そ」と同言にて、それをそし、そすと活かせたるなり。

## ○花風

枕草子春曙抄本三月はかりのゆふぐれに、ゆるく吹きたる花かせいとあはれなり」とある花かせといふ詞は例もなく無理なる詞なり、一本に「あまかせ」とあるは雨風にて、これも聞つかぬ詞なれど、先意は聞えたり但しこれは「はるかぜ春風にして」となると其形似たるより寫しひかめたるならん、

## ○紅の御ぞよろしからんや

枕草子春曙抄本まだからの御ぞも奉りながらおはしますぞいみじき、紅の御ぞよろしからんや云云此詞いかにも解しがたき詞なり、春曙抄頭注に、后宮御装束に紅をめしたらばよろしかるまじくやとなり、めつらしき文體なりとあれど、尙其意明かならず、按ふに、これは此時后宮紅の御衣をもめされ、また其他に次にいへる柳

えひぞめ等の御衣をも重ねてめされしにて、紅の御衣よろしからんや」とは、紅の御衣は素より結構にて、決して悪くは非ずの意にて、よろしは例の普通尋常にて可なりといふほととの意、やは反語のやにて、紅の御衣素より普通ならんやは、うるはしくめてたし、然れども、其中に云云の御衣をも重ね給へは、殊にめてたしといふ意にて、次の文へかけてよく、味はふべし、

## ○ふきがたり

枕草子春曙抄本かゝる事などをみつからいふは、ふきかたりにもあり云云春曙抄傍注に、耽語也身をふけり語るになるとなりといひ、清水濱臣は、今俗の吹聴の吹の義かといへり、但しいづれも明かならず、これは中島廣足の窓の小篠後編に、月詣集にある安心法師の歌を引ていへる説ありて、ふきかたりはふけりかたりの意にて「ふけ」とほこと通へば「ほこりがたり」の謂ならんといへるぞよろしき、即ちわれぼめの高慢談の義なり、